高山の文化を高めた人々

「表千家茶道教授 林千代子先生を語る」

淺野晶子

高山では、昭和三十年から四十年にかけて茶道が大変な盛り上がりをみせました。当時、独身女性の心得として、茶道や華道を習う事が常識のように思われていました。こうした時代、表千家茶道教授として多くの弟子を育てられたのが、林千代子先生です。

高山で林先生と言えば、女傑で教育者であった林フジ先生があまりにも有名ですが、千代子先生はその実妹にあたります。

林家は、金森家お抱えの刀剣の研師を家業とし、金森家移封（一六九二年）後も高山に残り連綿として続いた家柄で、千代子先生は、林家の次女として明治三十九年十月に生まれました。

弟は家督相続直前に早世しましたが、姉フジは既に教員の道を歩み始めており、先進的な教育者として知られていました。その後上京して教育者の道を探求し、市川房枝女史らと親交をもちました。

昭和53年 千代子先生（中央）と共に

千代子先生は、姉を頼って上京し、芝・増上寺の事務員として働き職場結婚しました。結婚生活は順調に進むかと思われましたが、婚家の空気に馴染めず離婚、高山に帰り両親と同居しました。そして両親の介護のかたわら茶道の道に入り、資格者となると近隣の子ども達向けに「お行儀会」を作り、自宅で茶道教室を始めました。

京都大原の茶会にて（前列左:千代子先生）

五十歳を過ぎてからも茶の湯の道をさらに究めたいとの思いが強く、丸万百貨店（マルエム百貨店）を営む平田志（じ）つ女史が、留学青少年の指導を行うために京都下鴨に開いた学生寮に寄宿し、表千家家元の内弟子となることができました。

ここでの修行研鑽の結果、昭和三十三年に茶道教授最高位の「乱飾り（みだれかざり）」の直伝を授けられ帰郷しました。当時の高山には「乱飾り」を相伝した教授者はおられず、自宅を開放して指導にあたられました。

京都での修行中にたくさんの人脈に恵まれ、相国寺派管長（金閣寺住職）・大津厂堂老師、千家流織元・大坂有香代さんなどと帰郷後も交流が続き、弟子たちを連れて京都の茶会に招かれることも有りました。また、紫野大徳寺三玄院の月釜も、千代子先生が席主として献茶されました。

茶の湯の指導では、一挙手一投足、細かな所作、お手前のしぐさに至るまで指導され、茶道の根本は「一期一会」「報恩感謝」の心を育てるにある、との信念のもと、社中（喜千会）を立ち上げられました。そして昭和四十二年、市内の皆様のご協力を得、大覚寺管長の染筆をいただき、庭師都竹抱石氏に大江石を寄贈いただいて、国分寺に茶筅塚を建立しました。

この碑は、「和敬清寂の原点に還ることを昂揚し、茶道を志すもの流派来歴を問わず、報恩感謝の心を育てなければならない」と示しており、毎年開催される法要茶会によって、五十年後の今日まで一度も休むことなく伝えられています。

国分寺茶筅塚

千代子先生は、昭和四十七年七月、実姉フジ先生を見送られた後、独居を続けながら子弟の指導にあたり、平成六年七月、八十七歳の天寿を全うされました。

高山をはじめ、小坂、古川、下呂などで指導を受けた方々、また飛騨から遠くに縁づいた方々の心に、千代子先生は今も生き続けています。